

子どもの主体性と適応感の関係に関する縦断的研究

浅海, 健一郎
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/18435>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 10, pp.217-223, 2009-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

子どもの主体性と適応感の関係に関する縦断的研究

浅海健一郎 九州大学大学院人間環境学研究院

A longitudinal study about the relationship between “SHUTAISEI” (self-direction) and “the feeling of adaptation” in children

Kenichiro Asami (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

The purpose of this study is to examine the relationship between “SHUTAISEI (self-direction)” and “the feeling of adaptation” of children from longitude survey by means of interviews and by the questionnaire method. From the results of this longitude survey, which took place over one year, the relationship was examined from a clinical point of view comparing the experiences of each child during the survey. The results in each case did not necessarily coincide with results obtained by statistical analysis for a large mass of children. But the results showed that the level of “the feeling of adaptation” varied in accordance with the level of “SHUTAISEI (self-direction)”, fairly well. From these results and considerations, the indication is that there are some environmental factors in school life which influence the “SHUTAISEI (self-direction)” and “the feeling of adaptation” of a child. It would be useful to conduct the survey mentioned here in school fields to find out mental problems of children and to be able to take remedial action at an early stage of non-adaptation.

Key Words: SHUTAISEI (self-direction), the feeling of adaptation, longitude survey

1. 問題と目的

今日、いじめや不登校に象徴されるような子どもの問題は、児童・生徒と学校、またそれを取り巻く社会の中で大きな問題になっている。問題行動を起こすまでに至らないにしても、学校を中心とした生活の中で多くのストレスにさらされている子どもたちは、毎日の生活に疲れを感じたり、今の環境になじめないと感じたりしていることもあるだろう。

ところで、近年日本においては、子どもが自ら考え行動できる「生きる力」を目標とした教育が大きく唱えられてきている(文部科学省, 2008)。また、学校現場においては、“自ら学ぶ子どもを育てる”という形で研究が行われている(新南陽市教育研究所, 1997)ように、自ら主体的に学ぶ子どもの育成が、大きな目標として掲げられている。その背景には、今日の学校を中心とした生活の中で、多くのストレスにより、子どもたちが、自ら考え、自ら行動できるための基盤としての自分らしさ、言い換えれば「主体性」が十分に発揮できていない為だと考えられる。“「主体性」とは「主体」が他と関わっていく中で現れてくる、性質としての属性である”(浅海ら, 2001)と考えられるが、周囲の環境や人間関係などから受ける過度のストレスは、子ども達の主体性の十分な発揮を阻害する要因になっていると思われる。本来、主体性とは個人(主体)に必然的に伴うものであるため、過度のストレスなどの阻害要因を取り除くこと

で、主体性も回復し、本来のその子らしい生き生きとした「生きる力」を取り戻すことができ、周囲の環境にも、積極的に自分らしく主体的に関わっていくことで、よりよく適応できると考えられる。

また、心理学、特に心理臨床における主体性の問題については、菊池(2002)は心理的な援助行為の本質はまさに人の主体性に関わり、これを強化することであると述べており、心理援助とは“純粋主体対面援助行為”(菊池, 2004)であるとしている。また、不登校の要因として、平井(1978)は、主体性と似た概念である、自主性の欠如の問題があると述べ、不登校児には自主性の発達(停滞)があると述べている。さらに、実証的な研究として、小学校入学時における自主性の発達と学校適応に関した研究が見られる(千羽ら, 1995)。

よって、筆者もそのような観点から、質問紙による実証的な方法で、子どもの「主体性尺度」を作成した(浅海, 1999)。そして、登校児と不登校児を対象とした、主体性と適応感の関係についての調査を行い、登校児と比べた不登校児の主体性と適応感の特徴についての検討を行った(浅海, 2006)。その結果、主体性と適応感の間には有意な正の関係が見られ、主体性が高いほど適応感が高いという結果が得られた。また、不登校児は登校児と比べ、「主体性尺度」に含まれる、自己表現に関する因子項目の得点が低いことと、適応感も全般的に不登校児は登校児より低いことが確認された。よって、主体性が適応感に関わる一つの要因として挙げられることが

実証された。

一方、筆者の先行研究(浅海, 2006)においては、多人数を対象とした統計的な分析による、主体性と適応感の関係については明らかになったが、一人一人を対象として見た場合にどのような関係性があるのかについては明らかではない。また、子どもたちは一人一人、実生活の中で様々な体験をしながら成長しているので、縦断的に調査を行い、一定の期間を経る中で主体性と適応感について、どう変化しているかを知ることが、臨床的な意味においては重要となってくるであろう。さらに、質問紙調査と同時に、子どもの日常生活で起こった事や、そこで感じた事を「面接調査」を通して直接聞くことによって、主体性と適応感の関係性について、より深い考察ができると考えられる。そして、その中で、どのような事が主体性と適応感の変化に影響を与えるか、あるいは主体性を育むために必要な要素を見いだせるのではないかと思われる。

よって、本研究においては、主体性と適応感の関係について、日常生活上の出来事を含めて個別に縦断的に質問紙法、面接法の双方より調査を行い、関係性についての、より臨床的な側面からの考察を行うことを目的とする。

II 方 法

1. 調査対象 A県B市C地区の小規模な小学校5年から中学校1年までの児童・生徒9名(11歳~13歳[第3回調査時]:男子3名,女子6名)。対象者は筆者も関わりがある放課後の学習サークルに参加する児童・生徒。その内1年間に渡る調査が可能であった児童・生徒で、さらに本人の承諾を得て面接が可能であった者である。

2. 調査内容 主体性尺度(浅海, 1999):「積極的な行動」「自己決定力」「自己を方向付けるもの」「自己表現」「好奇心」の5つの下位尺度4項目ずつ、計20項目から構成される。適応感尺度:長島ら(1958)による適応性診断テストの内、「学校関係」「退避的傾向」「自尊感情」を測るもので、それぞれ、外的な適応(能動的な適応, 受動的な適応)、内的な適応の指標とする。なお、「適応感尺度」の「退避的傾向」については、他の2つの下位尺度との整合性をとるため、得点が高いほど「退避的傾向」が低いものとする。各尺度は15項目ずつで構成される。

上記の尺度について、X年12月~X+1年11月の1年間にわたり、3回の質問紙調査(第1回目X年12月, 第2回目X+1年6月, 第3回目X+1年11月)を行った。調査は放課後のサークルの時間を利用して実施した。分析方法としては、時期を独立変数とし、主体性尺度全

体及び、適応感尺度各々の下位尺度を従属変数とする分散分析を一人一人の子どもについて行った。一人一人の得点の時期による変化を見るために、各尺度の一人一人における平均点の変化について分析を行った。

また、3回目の調査時に、過去1年間の日常生活上の出来事や変化について聞き取る面接調査を行った。面接は、児童・生徒の担任を通して、子どもたちへの面接調査の承諾を得た後、児童一人一人にテープ録音の許可を得、放課後の空き時間などを用い実施した。質問内容としては学校、友達、家庭を中心に、過去1年間にあった日常の出来事について質問を行い、自由回答を求める半構造化面接とした。ただし、Bさんに関してのみ3回目の調査が行えなかったため、母親より承諾を得て、本人面接ではなく母親面接を通して情報を得た。

III 結果と考察

調査対象の内、特徴的な結果を示した4名を取り上げた。質問紙の結果と、面接の内容を照らし合わせながら、主体性と適応感の関係性について考察を行う。

1. 「主体性」、「適応感」とも大きく上がった事例

A君(11歳・男子)

(1) 質問紙結果:質問紙結果は、Fig.1及びTable 1のとおりである。

(2) 面接結果

学校について 先生に関しては以前と変わったことはない。読書が好きになり、歴史の本をよく読んでいる。勉強を頑張っているの、先生にほめられることが多い。先生に叱られることは全くない。

友人について 兄と比べて友達の数は、4年生の時に負けていると思っていた。しかし、5年生になって友達がたくさんでき、とても自信ができた。5年生になってから、市内の競技大会に参加できた。また、空手をずっと習っていたが、5年生になってから試合の数が増えて、色々な地域に友達ができた。自分から話しかけると、友達の方からも話しかけてくれるので楽しい。他の学校の特長や生活が分かって楽しい。自分の学校と比べて、人数も多いし、スポーツや勉強が優れていることを知って、頑張るやろうという気になった。何でも話せる親しい友達がいる。

家庭について 兄がしていたお手伝いをするようになった。家の中では、パソコンのゲームでよく遊ぶ。お父さんとよくすることが多い。お父さんは自分の相手をよくしてくれるので嬉しい。お母さんや、そのほかの兄弟ともよく遊ぶ。時々叱られるが、何でもよく家で話をする。

(3) 考 察

質問紙調査の結果、小学校4年生のX年12月から、5

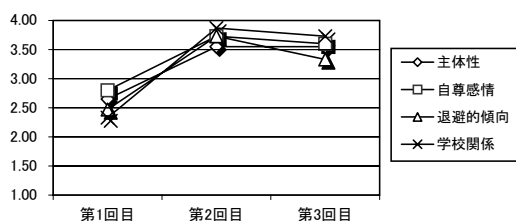


Fig.1 事例1 主体性と適応感の変化

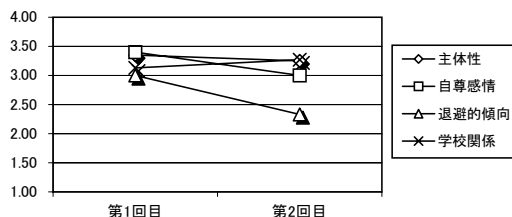


Fig.2 事例2 主体性と適応感の変化

Table 1
分散分析表 (事例1)

	第1回目	第2回目	第3回目	F 値 (多重比較)
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	
主体性 (n=20)	2.65 (0.75)	3.55 (0.51)	3.55 (0.61)	13.71** (2>1 3>1)
自尊感情 (n=15)	2.80 (0.68)	3.73 (0.46)	3.60 (0.51)	12.41** (2>1 3>1)
退避的傾向 (n=15)	2.46 (0.52)	3.73 (0.70)	3.33 (1.11)	9.43** (2>1 3>1)
学校関係 (n=15)	2.33 (0.49)	3.87 (0.35)	3.73 (0.46)	56.82** (2>1 3>1)

+ p .10, *p .05, **p .01

Table 2
分散分析表 (事例2)

	第1回目	第2回目	F 値
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	
主体性 (n=20)	3.35 (0.88)	3.25 (0.71)	0.16
自尊感情 (n=15)	3.40 (0.51)	3.00 (0.76)	2.90+
退避的傾向 (n=15)	3.00 (0.93)	2.33 (0.72)	4.83*
学校関係 (n=15)	3.13 (1.06)	3.27 (0.59)	0.18

+ p .10, *p .05, **p .01

年生に上がったX+1年6月にかけて、主体性、適応感の3つの下位尺度(自尊感情、退避的傾向、学校関係)ともに、1%水準で有意差が見られ、大きく上昇していた。グラフから見ると、特に適応感の中の学校関係に大きな変化を示している。これらの結果は、A君へのインタビューの中で、「新しい学年になってから、友人が増えて自信ができた」、「5年生になってから試合の数が増えて、色々な地域の友達が増えてきた」、「勉強に熱心に取り組む先生にほめられる」などの言葉に現れている変化を表していると考えられる。グラフからも主体性、適応感とも一緒にのびており、新しい学年になってからの変化が大きかったことを示している。全体を通して、A君にとっては、学年が変わってから友人関係が広がり、また勉強などにも意欲的に取り組むことで、先生からも評価されることなどによって自信につながり、そのことが主体性と適応感を相乗的に高めることになったのではないと思われる。

2. 「適応感」が大きく下がった事例

Bさん(13歳・女子)

(1) 質問紙結果：質問紙結果は、Fig.2及びTable 2のとおりである。

(2) 面接結果

学校について 部活でレギュラー選手として、中学1年生の中から1人のみ選ばれる。レギュラー選手に選ば

れてから、自分がやっかみを受けている感じがしている。

友人について 気の強い、活発な友人が多いので、一歩引いている。自分を出したいと思うこともあるが、目立つと色々言われるので控えるのが一番よいと思う。

家庭について 中学校に入学してから、親が学校の勉強に対して特に熱心で、プレッシャーをかけられる。父も母も上昇志向で、姉が高校受験生であると同時に、生徒会の役員をしているので、比較されてプレッシャーをかけられる。姉は周囲の期待も大きいのにに対し、自分は頭はよいのに努力しないと思われている。姉が目立ちすぎるのが原因なのかもしれない。家族の中で喧嘩があり、私が悪態を祖母につき、それを母がやんわりと受け止めることができず、そのことが母と祖母との争いになっている。家庭が平和であって欲しい。

(3) 考察

Bさんは、2回目の調査以降、不登校状態となり、3回目の調査ができなかったが、小学校6年生のX年12月から、中学校入学後のX+1年6月にかけて、適応感に大きな変化を表し、その背景を母親面接を通して詳細に聞いた為、取り上げた。

まず、質問紙調査に関して、退避的傾向に5%水準で有意差が見られ、自尊感情には有意傾向が見られた。どちらも下がっていた。特に退避的傾向は非常に大きく下がっている。これらの結果は、友人関係についても、「気の強い、活発な友人が多いので、一歩引いている」、

「控えるのが一番いいと思う」などにも現れており、また学校でも「部活でやっかみを感じる」や、家庭でも様々な問題があり、特に姉と比較され、かなりのプレッシャーがあるようである。退避的傾向が大きく下がっていることについては、学校での出来事が大きく反映されているだろうし、自尊感情については、家庭でのプレッシャーが大きな影響を及ぼしているだろうと想像できる。学校でも家庭でも悩みを抱え、本人の苦痛は相当なものであったと思われる。

3. 「主体性」が大きく上がった事例

Cさん (13歳・女子)

(1) 質問紙結果：質問紙結果は、Fig.3及びTable 3のとおりである。

(2) 面接結果

学校について 中学校に入学してから一番困ることは、担任の先生に怒られるようなことをしていないのに、職員室に1人呼ばれ、友達もいる前で叱られること。他の先生もいて、友達も聞いているのにずっと怒られる。それで、いつもびくびくしている。しかし、他の先生には好きな先生がいる。中学校は厳しいと思っていたが、それ以外のことでは、小学校からあまり変わらなかった。ただ、先生によく怒られることが違う。

友人について 特に大きく変わったことはない。ただ、学校が終わって、友達と遊ぶことがない。小学校の時は、友達と一緒にしゃべる人がいないと寂しかったが、中学校になって余り感じなくなった。中学校に入る前は、先輩などにひどい人がいるといやだと思っていたが、入ってみると嫌がらせをされたり、ひどく言われたりすることはなかった。

家族について 春休みに海外にホームステイに行き、自分で考えられるようになった。親とはあまり話をしない。家族と休み中、旅行によく行く。自分のことで変化を感じる。

(3) 考察

Cさんについては、統計的には有意ではないが、質問紙の結果のグラフ上から、小学校6年生のX年12月から、中学校入学後のX+1年6月にかけて、主体性が大きく上昇している。これは、「春休み海外にホームステイに行き、自分で考えられるようになった。」「自分のことで変化を感じる。」というように、海外でホームステイをしたことが、Cさんにとって重要な出来事であったことを示していると考えられる。「自分で考える」といったことは主体性の現れの中でも非常に大きなことであるので、この体験がCさんにとっての自分を変えるほどの機会であったと思われる。また、友人などとも、「小学校の時は、一緒にしゃべる友達がいなくて、寂しかったけれど、中学校からはそうでもなくなった」とあ

るように、他人への依存度が減り、自立した面が強くなっている。一般的に思春期では友だちのグループで行動することが多く見られるが、その中であって一人でいても特に寂しくないといった感じは、主体性を持つ事への一つの現れだと思われる。

4. 「主体性」は下がったが「適応感」は上がった事例 Dさん (12歳・女子)

(1) 質問紙結果：質問紙結果は、Fig.4及びTable 4の通りである。

(2) 面接結果

学校について 5年生の先生は厳しかったが、今の先生は好き。好きな先生がいてよく話す。学校ではあまり注意されない。すごく誉められて、うれしかったことがある。部活動のことで、入賞して新聞に載るといって、自分にとって、重大なことがあった。

友人について 学校では、たくさんの友達と一緒にいる。学校が終わって一緒に遊ぶことがある。何でも話せる友人もいる。

家族について 家で、父や母にたまに叱られる。家族と一緒に旅行に行った。(嬉しそうに) 性格が変わった、自分で活発になったと思う。

(3) 考察

Dさんは、小学5年生のX年12月から、6年生になったX+1年6月にかけて、統計的に主体性に有意傾向が見られ、得点が下がっていた。その一方、学校関係に5%水準で有意差が見られ、得点が上がっていた。インタビューの中では、詳細な情報は得られなかったが、学校での友人関係や、先生との関係も良好であるようだ。特に「何でも話せる友人がいる」、「好きな先生がいてよく話す」といったことは学校生活を楽しくさせる要素として大きなものと思われる。よって、学校関係の適応感が大きく上がったことはよく分かる。その一方で、主体性が下がったことに関しては、インタビューの中では上手く見いだすことができなかった。

しかしながら、小学6年生のX+1年6月からX+1年11月にかけては、統計的に有意ではないが、グラフ上で見て分かるとおり、主体性がX年12月の水準まで上がっており、適応感も引き続き高い状態である。この時期の主体性の上昇は、X+1年11月の面接調査で「性格が変わった、自分で活発になったと思う」との言葉に現れているように、この時期の主体性の大きな変化を示していると考えられる。

IV 総合考察

1. まとめ

本研究の目的は、主体性と適応感に関する質問紙に

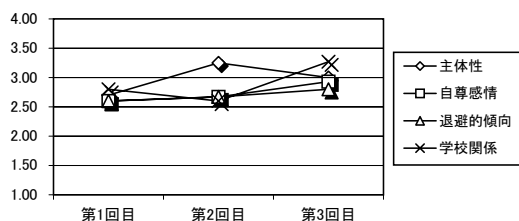


Fig.3 事例3 主体性と適応感の変化

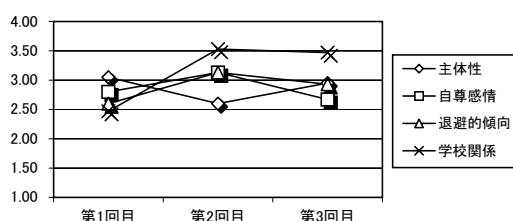


Fig.4 事例4 主体性と適応感の変化

Table 3
分散分析表 (事例3)

	第1回目	第2回目	第3回目	F 値
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	
主体性 (n=20)	2.75 (0.97)	3.25 (0.97)	3.00 (0.97)	1.33
自尊感情 (n=15)	2.60 (0.63)	2.67 (0.62)	2.93 (0.96)	0.82
退避的傾向 (n=15)	2.60 (1.06)	2.67 (1.29)	2.80 (1.21)	0.11
学校関係 (n=15)	2.80 (0.78)	2.60 (1.06)	3.27 (0.88)	2.11

+ p .10, *p .05, **p .01

Table 4
分散分析表 (事例4)

	第1回目	第2回目	第3回目	F 値 (多重比較)
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	
主体性 (n=20)	3.05 (0.51)	2.60 (0.88)	2.95 (0.61)	2.39+
自尊感情 (n=15)	2.80 (0.56)	3.13 (0.99)	2.67 (0.49)	1.70
退避的傾向 (n=15)	2.60 (0.63)	3.13 (1.25)	2.93 (0.59)	1.42
学校関係 (n=15)	2.47 (1.06)	3.53 (0.92)	3.47 (0.64)	6.78** (2 > 1 3 > 1)

+ p .10, *p .05, **p .01

よる縦断的な調査と、子どもの日常生活の体験を聞き取る面接調査を通し、主体性と適応感の関係について、個別により臨床的に検討することである。

主体性と適応感との関係を考えてみると、主体性のある子どもは、自らが望む方向へ、周囲の環境を変化させたり、或いは環境に自分を適合させたりすることで、積極的に自分の状況を自分に好ましい状態にすることができるだろう。その点で筆者の先行研究の結果で示されたように、主体性と適応感の間に有意な正の相関があったことは、実証的な結果として意義深いものと思われる。

しかし、一方で、主体性のある子どもは“時には親や先生のいうことに反対し、はっきりと自己主張をするので、なかなか扱いにくいように見える”（野島, 1979）とあるように、周囲と対立し、思うような状況にならないこともあるだろう。そのようなことから、不登校に象徴される不適応にも、主体性はあるのだが、周囲と合わないため、不適応状態にある子どももいると考えられる。

その為、本研究においては、筆者の先行研究による、横断的な質問紙調査を通した統計的な実証結果から得られた、主体性と適応感の関係を、個人個人においても検証することが重要であると考えた。そして、子ども一人一人に焦点を当て、主体性尺度と適応感尺度の質問紙調査で得られた量的データの変化と、面接調査を通して得た日常の出来事などの情報の質的データの変化を、相補的に説明することで、一人一人の実生活の中でどういっ

た出来事が、主体性と適応感の変化に重要な意味を持っているか、1年間の調査の中で縦断的に探っていく。

面接調査においては、日常の出来事として大きく、学校、友達、家庭についての事柄を中心に聞いていったが、主体性と適応感に影響を与える要因としては、全体を通して見ると学校、友達の要因が大きいように思われる。特に今回の調査の対象である、思春期に当たる子ども達は、友人の影響を大きく受ける時期であり、学校での友人関係が重要な意味を持つであろう。また、学校の先生からの影響も大きいようであり、先生から褒められたり、逆に叱られたりすることが、主体性や適応感の変化のきっかけになっているように思われる。

事例1のA君のように、学校や学校外での活動を通して友人が増え、勉強にも意欲的に取り組み、先生から褒められることで、主体性と適応感が大きく上がった事例もある一方で、逆に学校での友人からのやっかみや、勉強のプレッシャーなどで適応感が大きく下がった事例2のBさんの事例もある。また、事例3のCさんのように、海外にホームステイに行ったことで、自分に変化を感じるとあるように、非日常的な大きなイベントが、主体性の変化のきっかけになることも見受けられた。

また、今回の調査の特徴として、第1回目の調査から第2回目の調査の間に、進級や小学校から中学校への進学時期を含んでいるため、その事による子どもを取り巻く環境の変化が、主体性と適応感にも、大きな変化

が生じるきっかけになっていることが、明らかになった。進級や進学等の変化は、A君のようにプラスの変化を生み出すこともあれば、Bさんのように、過度のストレスやプレッシャーの元になることがあり、その時期をいかに過ごすか、子ども状態をよく把握しながら周囲の対応を考慮する必要があるであろう。

面接を含めた全体的な印象としては、主体性と適応感とは、どちらがどちらを規定するというものではなく、循環的に影響を及ぼしているように思われた。必ずしも、主体性が上がれば適応感が上がるという、直線的な関係だけが見いだされた訳ではなかったため、その点から考えると、子どもの状態に応じて、主体性、適応感それぞれに焦点を当て、双方を高める働きかけをする必要を感じる。いずれにしても、日常の変化が質問紙の結果にも端的に現れていることから、質問紙から現れた結果を基に、日常の子どもの状態を把握する指標とすることは有効であると考えられる。

本研究のような形で、学校臨床などにおいて、調査を行うことは、児童・生徒が心の中に抱えている問題を早期に発見でき、不適応状態の改善の指標とすることができるであろう。心の相談員やスクールカウンセラーの活動の中で、このような指標を用い、いち早く子どもの心の状態を把握することができれば、問題が深刻になる前に対応ができ、問題解決にも役立つと考えられる。

2. 今後の課題

今回の調査の中の面接調査において、調査対象であった小学校5年生から中学校1年生の思春期初期の子ども達は、思ったり感じたりしたことを言語化する力がまだ弱いため、内面的なものまでを含めた詳細な情報が十分得られなかった。それは、あらかじめ予測されることであったので、学校、友人、家庭に関する内容に焦点を当てて、それらを中心とした面接者の問いかけに対して答えを求める形で半構造的に面接を行ったが、断片的な回答にとどまることも多かった。その点に関して、今回のように面接調査を調査時期の最後にまとめて行うのではなく、質問紙調査を1年間に渡って定期的に行ったのと同様に、面接調査も定期的に行うことで、より詳細な情報が得られると考えられる。そうすることで、日常起こった出来事による子どもの心理的变化を、質問紙調査による量的な側面と、面接を通じた質的な側面、双方をさらにより深く対応させて、結果について考察することができると思われる。

また、今後は、今回の結果と考察を元に、子どもの主体性と適応感を高めるための具体的な対応の仕方についても、考えていく必要があると思われる。

< 付 録 >

主体性尺度

積極的な行動

- ・あなたは、やることを人に言われなくても時間や場所などを考えて自分から進めますか
- ・あなたは、結果を気にせず、とにかく取り組むことができますか
- ・あなたは、つまづいたとき、自分なりの考えで乗り越えようとしますか
- ・あなたは、自分一人でもやってみようという気持ちが強く、失敗をおそれずやることができますか

自己決定力

- ・あなたは、自分が考え出したよい意見でも、みんなに反対されると、理由をよく調べないで、すぐ取り消してしまいますか
- ・あなたは、やろうと思うことも、人からだめだとけなされると、すぐ自信がなくなってしまいますか
- ・あなたは、自分一人でやることでも自分だけでは不安なので、友達と一緒にすることが多いですか
- ・あなたは、よく考えもしないで、友達の言葉を、すぐ信じてしまうことが多いですか

自己を方向付けるもの

- ・あなたは、熱中しているもの(趣味・スポーツ・音楽など)を持っていますか
- ・あなたは色々なことについて、おもしろい、やってみいたいという気持ちがありますか
- ・あなたは大きな目標を持ち、それができるようにこつこつ取り組みますか
- ・あなたは、自分のしていることが、よいか、悪いか分かりますか

自己表現

- ・あなたは、自分の考えを言うことができますか(発表だけでなく、文や絵や身体表現でも)
- ・あなたは、自分の言葉で自分の考えをいえますか
- ・あなたは、今までやってきたことをもとにして、遊びの中などで自分の考え方や工夫を出すことができますか
- ・あなたは、自分の考えを持って、進んで自分から言いますか

好奇心

- ・あなたは、新しいことをどんどんやってみる気持ちがありますか
- ・あなたは、分からないことはすぐに自分で調べようとしますか
- ・あなたは、正しいと思ったことは、時間をかけてもやりぬきますか
- ・あなたは、時々一人になって、自分の進む道を、よく考えてみますか

適応感尺度の項目例

自尊感情

- ・あなたの友達は、あなたに不公平なことをすることが多いと思いますか。
- ・あなたは、へまや失敗をやって笑われることが多いですか。
- ・あなたの友達は、あなたのためになるようなことをしてくれることが多いですか。
- ・あなたは、自分が世の中の人々のためになる仕事をできるように思いますか。

退避的傾向

- ・あなたは、ぼんやりと、おもしろかった遊びなどを思い出していることが時々ありますか。
- ・あなたは、友達にくらべると、心配なことが多く、不幸だと思いますか。
- ・あなたは、非常にはずかしがりやだと思いますか。
- ・あなたは、勉強しているとき、いつのまにかほかのことを考えて、ぼんやりしてしまうことが多いですか。

学校関係

- ・あなたの学校の友達は、あなたとけんかすることが多いですか。
- ・あなたの先生は、あなたの気持ちや考えを、分かってくれていると思いますか。
- ・あなたの先生は、生徒にえこひいきをしていると思うことが、時々ありますか。
- ・勉強がむずかしいので、あなたは、学校がつまらないと思うことが、時々ありますか。

< 付 記 >

本研究にあたり、ご指導下さいました九州大学大学院人間環境学研究院教授野島一彦先生に深謝いたします。

また、本調査にご協力頂きました学校の各先生、児童・生徒の皆様方に、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。

引用文献

- 浅海健一郎 (1999). 子どもの「主体性尺度」作成の試み 人間性心理学研究, 17(2), 154-163.
- 浅海健一郎・野島一彦 (2001). 臨床心理学における「主体性」概念の捉え方に関する一考察 九州大学心理学研究, 2, 53-58.
- 浅海健一郎 (2006). 主体性と適応感の関係に関する研究 - 不登校児と登校児の比較を通して - 心理臨床学研究, 24(1), 44-52.
- 平井信義 (1978). 登校拒否児 - 学校ぎらいの理解と教育 - 新曜社
- 菊池義人 (2002). 援助専門家としての臨床心理士 久留米大学大学院心理教育相談室紀要, 3, 3-13.
- 菊池義人 (2004). 純粋主体対面援助行為としての臨床心理行為 心理臨床学研究, 22(3), 262-272.
- 文部科学省 (2008). 中学校学習指導要領 (2008年3月) 大蔵省印刷局
- 長島貞夫・山崎 正・藤原喜悦 (1958). 新訂 適応性診断テスト 金子書房
- 野島一彦 (1979). 問題のとらえかた 成瀬悟策 (監修), 幼児臨床心理学, ミネルヴァ書房, 15-24.
- 千羽喜代子・酒井仁美 (1995). 自主性の発達から見た小学校1年生の学校生活への適応 大妻女子大学紀要 - 家政系 -, 31, 219-227.
- 新南陽市教育研究所 (1997). 自ら学ぶ子どもを育てる 研究集録第1号, 新南陽市教育研究所